

2015. 7. 2 (木)

大学に進学することと社会学を学ぶ意味

高原 基 彰

チャペルは聞く人も限られていますし、あまり他のところではしないのですけれども、最初に自分の個人的な話をさせてもらおうかと思えます。

私の生まれは神奈川県川崎市で、関西で言うと尼崎のようなところです。尼崎といっても南部と北部が違うのと似ていて、川崎も南北で雰囲気が違う。南は海側で、港に面した古くからの労働者の町です。北は山側で、東京で働く人のベッドタウン、住宅地です。私の地元は後者なのですが、それでもやはり、階層の高い地域という感じではありません。

私は1976年生まれで、大学に入学したのは1994年です。高校は地元の県立高校で、クラスメイト40名くらいのうち、4年制大学に進学した者は4~5人でした。高校の頃の地元ではバンドを組むことが流行っており、周りの友達も多くバンドをやっている、彼らはどんどんそちらにのめり込んでいきました。私もどうせ大学なんか行くことないだろうと漠然と思っていたのですが、高校の英語の先生に強く言われて、親も学費なら出すと言ってくれたので、ICUという大学を受けてみたら、たまたま合格しました。

住む世界の分岐

高校の同窓生は、半分くらい専門学校に進学しました。2割が就職、2割は進路未決定、残り1割が大学進学という感じだったと記憶しています。進路未決定の人は、アルバイトで働くしかなくて、後に「フリーター」と呼ばれることになります。ちなみに専門学校に行った人々の少なからぬ割合も、数年後にこのフリーター層に合流していきました。美容・理容師、調理師、あとアパレル関係などで、思うように資格取得できなかったり、できても仕事がなかったりすると、アルバイト以外の選択肢がなかったからです。

そうやって高校を卒業すると、大学で出会ったのは各地の進学校出身の、「東大落ちた」とがっかりしているような人たちでした。それまであまり接したことのない人々だったので、最初は「なんて気取った奴らだろう」とか思いましたし、ギャップにだいぶ混乱しました。しかしそちらと接する時間が長くなっていくうち、地元の友人とはだんだんと距離感ができてしまった。なんとなく「住む世界が違ってきちゃったのかな」という感じがして、連絡もあまり取らないようになり、地元からは縁遠くなくなってしまいました。

大学を卒業して大学院生だった頃、1つ下

ですってバンドをやっていた地元の後輩と、路上でばったり会いました。東京の新宿で、その後輩がティッシュ配りの仕事をしていたんですね。私が「あれ、久しぶり、何やってんの？」と言うと「ティッシュ配ってるんです」と言っていて、「見張ってる人がいるからあんまりしゃべれないんですよ、すいません」って。「あ、そうなの」というのが、直接会った最後です。

つい数年前、彼らのバンドのことを思い出すちょっとしたきっかけがあって、ネットで検索してみたんです。いわゆるインディーズでアルバムも一応出していますが、もともと広く売れようとしている音楽でもないし、もちろん知られてはいません。すると、彼らはその後もずっと同じバンドをやっていて、ホームページもあったんですね。タトゥーがいっぱい入った体のライブ写真とかがアップされていて、ブログもあるんです。

クリックしたら、結構いろいろな文章が書いてありました。内容は、バンドのことだけじゃなくて、むしろ日々の仕事のことの方が多い。その後建設現場の仕事についてようですが、今東京は再開発ラッシュですし、また東日本大震災から東北のほうでも建設が多いですから、そちらで体を動かす仕事というのは人手不足なんですね。その道でキャリアを積んでいる彼は、引っぱりだこで忙しいようでした。「きょうは晴海の現場です」「いやー、きょうは暑いな」とか、現場の写真をたくさんアップロードしていた。

他にもいろいろなことが書いてあります。一読してみても分かるのは、どうも既に子どもが2人いるらしいこと、また親として、働く人、社会人として、とてもいろいろなことを考えているということです。たまたま大学

を出て、その後も勉強する機会に恵まれた私の方が、たぶん知識の量が多いでしょう。しかし、彼なりに一生懸命何かを考えようとしているのだなということが、すごく伝わってくる文章です。ブログなのでふざけたりもしていますが、

率直に言ってしまうと、今大学に通っている皆さんの大半より、彼の方が真剣に何かを考えようとしているし、文章表現もうまいです。もちろん年を取って賢くなる、年齢の効果ということもあるかとは思いますが、これから皆さんが大学を出て何になるか分かりませんが、たとえばこの大学は不動産業界に行く人なども多いです。その時、たぶん皆さんはスーツを着ると思います。その皆さんがオフィスで書類を作って、現場に指示が行くとしましょう。そこには作業着を着て働く人がいて、私の後輩はその一人です。その人が、大学生のあなたがたよりも文章がうまく、いろいろなことを真剣に考えているかもしれない。

資格の価値下落

なぜそんなことが起きるのか。そこへ行く前に、もう一つお話ししましょう。私が大学を卒業した1998年は、まさに就職氷河期の真っただ中です。しかし私の大学の同窓生たちは優秀で、みんな結構いいところに就職していきました。私はちょっと間違ってしまったって、大学院に進んでしまったんですね。

その頃、1990年代というのは、国の政策と大学業界の方針として、全国的に大学院が大きく拡充し、大学院生の数が劇的に増えた時期でした。ところが、大学院をたくさん作って大学院生を増やしても、大学の教員は

じめ、大学院卒に向けた仕事は、そこまで増える訳ではありません。入ってくる人がどんどん増えるが、受け皿はあまり増えない。するとどうなるかというと、大学院の修士・博士という資格が、インフレを起こして価値が下がっていったんです。

同年代でも、勘のいい人は「これは何かのウソだろう」と気が付いたのかもしれませんが、私はもともと賢くもないので引っ掛かってしまったと言いますか。その後、月給のある仕事を頂くまで、長い時間がかかりました。29歳の時に3年間契約の仕事を頂いて、その3年の間に韓国や中国で研究する機会をもらったのですが、それまでの20代は、一コマいくらという非常勤講師をいくつかと、あともらえる時に原稿料をもらって、カツカツと生活していました。

カツカツの頃、大学の同窓生が集まる機会があって、「車は何を買うか」とか「マンションを買うかどうか」とかいう話をしていて、私にはそんなお金はまったくないし、考えたこともないので、上の空で聞いていました。しかし、外資系企業で働いていた一人が、私の方を向いて「金があったって時間がないから、家と車と、あとランチくらいしか使い道ないんだよ。高原は好きなことをしてうらやましいな」と言いました。もちろん彼の優しさで、私はかえって恥ずかしかったのですが、彼もまったくのお世辞だったのでなく、何パーセントかは本気でそう思っていたんだろうなと、今になって思います。3年契約が終わってから、またしばらく非常勤と原稿料生活の後、35歳の時に関西学院へ雇ってもらえることになりました。

さきほどの現場で働く後輩の話と、私自身の大学院生活の話と、あわせて考えてみまし

よう。90年代というのは、大学院と並行して、大学や学部の数が増えて、そもそもの大学進学者の数も激増した時代です。これが何を意味するかというと、私たちが経験した、大学院卒という資格の価値下落に続いて、大卒資格の価値も下落していったということです。現場仕事の人の中に、今現在の大学生より頭のいい人がいることは、そこまで摩訶不思議な現象という訳でもありません。大学進学率が今ほど高くなかった、つまり今ほど簡単に大学に行けなかったからです。多くの人が大卒になれるというのは、いいことなのでしょうけれども、その副作用として、大卒の価値はそれからずっと下がってきています。私よりもさらに年上、あるいは皆さんの親御さんが大学を出たという時の大卒の意味と、今の大卒の意味とは、全く違います。

今考えると大学院というのは、大学に起きたこの変化を、ある意味で先取りしていたんです。私たちが大学院に進んだ頃に、先見の明があって良心的な大人は、私たちを見て心が痛んだと思います。「確かに世の中それも良いと言っているし、彼らは気楽にそちらへ向かっているが、危ういな」というようなことですね。時が経って、自分が教員になって一番ストレスなことというのは、そこなのです。なぜみんな、このようなことに気付かないまま、あまりにも気楽に自分は大丈夫と思い込んでいるのか。気になるのは「就職」という2文字だけで、それがあればすぐみんなウソにだまされてしまう。確かに世の中ではうまいことが宣伝されているかもしれないけど、私たちのような経験をしている大人は「危うい」と思う、しかし能天気な人には言っても伝わらない。それが教員として一番ストレスに感じることです。

様々なウソと社会学

現在の大学について言えば、私が大学に進学した時、地元の友人たちと私の行き先が分かれた最大のポイントは「大学に行ったか行かなかったか」ということでしょう。どちらが優れているとか、どちらがより幸せだとかは、誰にも断言することはできません。しかし分岐していったことは事実です。そしてその後、大卒の価値が下がっていったということは、そういうポイントが、大学入学時点ではなくなってきたということです。おそらく今、このようにして同じ大学で、同窓生として学んでいる皆さん自身の間に、かつて私たちにあったような分岐点が、これからたくさん生じてくるということです。「なんとなく住む世界が違ってきちゃったな」という。

世の中にはウソがたくさんあり、そこから完全に逃れることは誰にもできません。自分で仕事し始めて、自分で生活を回していく、すると「あの時だまされて自分は損をしたのかな」などと思う時がいずれ来ると思えます。そして、そこから他者を羨んだり蔑んだりするだけの人というのは、そのままだまされ続けるだけです。大事なことは、気付いた時に「なるほど」と一度状況を冷静に振り返り、改めて「ここからは自分が決めてこうするんだ」という原則をはっきり持つということです。だまされたと気付いた時から勝負なのかもしれません。

このことは、社会学という学問にも深くつながっています。社会学というのは、何をしているか分かりにくいかもしれませんが、例えば、経済学は市場の合理化・効率化を目指す

ものです。医学は病的状態を治療するものです。社会学はこれより多種多様で、明確な定義のしにくい学問です。しかし、すべての社会学に共通の、根本的な原理というものがあって、それは、人間には自分のことを自分で考える能力があるということです。すると他者は他者で、自分自身のことを考えていることになります。ですから人間はお互いの、考える能力を尊重し合わなければならない。誰かの考えを支配することはできないし、独善的な考えに自閉し続けることもできません。人間同士が、お互いの考える能力を尊重して「話し合う」ところが「社会」であり、社会学とはそのような「社会」がいかにして成立するのかを考える学問です。

私が今現在、ちょっと危ないな、嫌だなと思うことの一つは、「自分で考えて決めることなど特にない」、「他者と話し合うことも特にない」、「世の中は当たり前の基準と法則があって自分も他者もそれに従いさえすればいい」というような雰囲気、どんどんと強まっているように感じることです。これは言ってしまうと、ウソの力が拡大しやすい世界です。社会学はこういうウソに対抗し、「考えて話し合う」という人間の能力を確保するための学問です。そのためにはまず「自分はだまされるかもしれない」という危機意識や、何がウソなのか判断できる知識や、なぜそれがウソなのかを説明できる技術が必要です。そういう人間たちが少しでも増えた方が世界は良くなるだろうということで、マイナーな学問とはいえ、社会学は世界中の大学で教えられ、今日に至っているのだと思います。

(社会学部准教授)